

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370834

研究課題名(和文)新出楚簡よりみた楚国史の新研究

研究課題名(英文)A New Study on History of the Chu State as seen from New Excavated Chu Bamboo-slips

研究代表者

工藤 元男 (KUDO, Motoo)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：60225167

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：<視日をめぐる研究> 戦国楚国において視日が訴訟の取り次ぎや王命の下落等で重要な機能を果たしていたことが包山楚簡で明らかとなった。それが楚王故事の楚簡の中では相手の尊称として変化している。これより楚国の視日が国家権力の中樞の職務であることが確認された。

<子儀をめぐる研究> 中国古代の秦晉間の「コウ之役」は晋が秦の東進を阻んだ戦役として重要で、その記事が清華簡「繫年」第八章にみえ伝世文献の内容とほぼ同じである。この戦役の後、秦は楚と関係を結び、それに関連する新資料が清華簡「子儀」篇である。しかし「子儀」篇は秦穆公と子儀との問答体で、具体的な外交内容を示すものではなかった。今後更なる検討を要する。

研究成果の概要(英文)："A study on Shiri". Shiri functioned as a messenger for litigations and king's order. This became clear from researches on the Baoshan strips excavated from the Chu state. Based on stories about the Chu king, it is also apparent that the meaning of Shiri had changed and the word started to be used as a honorary title in the Warring-states period.

"A study on Shiyi" the war in Xiao between the Qin and the Jin states is important for the Jin to stop the Qin's movement toward the East. We can find some sentences about this war in the eight chapter of Ji-nian in the Qinghua strips. The contents of sentences are similar to some other historical texts, but the chapter of Shiyi as an exception is related to the diplomatic relationship between the Qin and the Chu after the war. The chapter of Shiyi, which is a new historical evidence, has a question and answer format between the Duke of Mu in the Qin and Shiyi, but this does not show the detail of the diplomatic relationship.

研究分野：人文学

キーワード：楚簡 楚王故事 清華簡「繫年」

1. 研究開始当初の背景

近年、中国古代史研究上、とくに注目されるのは、戦国楚簡のめざましい出土である。そこで私は、とくに戦国楚簡の記事がどれほど当時の「史実」を反映しているのかについて関心を抱くことになった。そのため、それらの史料性について検証することをめざして、伝世文献との相互比較を行うことにした。

2. 研究の目的

現在までに、次々と発見されている楚簡の多くは、主に儒家や道家などの思想文献であり、また各国の王の故事も増加するようになった。したがって、楚簡が増加しても、その資料的性質から歴史研究には大して貢献しないように思えるかも知れない。このような出土資料の内容の偏りを克服して、それらの新資料をどのように「史料化」するか、本研究はその試みである。

3. 研究の方法

楚王故事の歴史性を検証する方法として、一つは伝世文献との比較がある。ある故事を伝世文献の関連記事とその異同を比較し、全体の史料系統を整理することで、その故事の位置付けが可能となる。もう一つは、戦国時代の一次資料をベースとして比較することである。本研究で活用したのは、戦国中期の楚の「司法簡」である。この一次資料を定点的な比較対象とすることで、比較される故事の時代性が浮上してであろう。

4. 研究成果

(1) 戦国楚国における視日

先に私は論文「具注暦の淵源」において、戦国楚国の裁判に関する司法簡の中の視日の存在に注目した。視日は王へ上程する訴状

等を取り次いでいる。このような視日の役割は、後漢明帝の頃の公車と同様で、ここに両者の共通の性質が看取される。視日とは「日（の吉凶）を視て」上書を取り次ぎ、凶日の取り次ぎを避けた職務に由来するのであろう。この視日の行動を通じて、戦国楚国の政治の実態の一部を知ることができる。ところが、この視日に関して見過ごした楚簡のあることに気づいた。

その一つは、上博楚簡「君人者何必安哉」篇（以下、「君人者」篇と簡称）である。その内容は楚昭王に対する范乗の諫言である。その冒頭に「范乗曰、君王有白玉三回而不殘、命爲君王賤之、敢告於A日」とある（以下、A・Bはその字形を指す略称）。整理者は末尾の二字（A日）を「見日」と釈す。この後に王が宮殿の前庭に出て、范乗に面会して述べる文が続き、「王乃出而A之」とある。「君人者」篇では名詞としての「見人」の「見」字と、動詞としての「見」字が同形に作っている。すると范乗は「見日」の取り次ぎで楚王への面会が許され、その上で楚王は范乗に「見（あ）った」のであり、「見日」と楚王は別個の存在と解される。

また上博楚簡「昭王毀室」篇では、楚王に訴えを取り次ぐ者が登場し、整理者の釈文ではこの者を「見日」とするが、その字形は「B日」であり、裘錫圭氏によればこれは「見日」ではなく、「視日」と釈される。このように、「視日」・「見日」の字形の違いによって、意味に相違のあることが分かる。その意味するところを考える前に、もう一篇の上博楚簡「命」篇を検討しよう。

同「命」篇は令尹子春と邦君の葉公子高の子による対話形式の作品で、その文中の四箇所に「B日」がみえる。そこで視日は令尹子春の尊称となっている。

陳偉氏は包山楚簡の発掘報告書において「見日」と釈されたこの存在を「楚王の尊称」と解した。その後、同「昭王毀室」篇が公表されると、そこにみえる「見日」を「視日」と改釈し、また旧説を変更して、これを「当日」・「直日」（共に当直者）の類とした。さらに「命」篇が公表されると、「楚王および高級官員に対する尊称」と訂正した。

以上の諸説の問題点を整理すると、次のようになる。字形の問題では包山楚簡などの「司法簡」の「B日」に作る字はみな「視日」と釈されるべきで、上博楚簡の楚王故事の「昭王毀室」篇や「命」篇も同様である。これに対して「君人者」篇は「A日」に作り、「見日」と釈すべきである。このように、楚簡の字形においては「視日」・「見日」の二形が存在するが、「君人者」篇の整理者は戦国楚文字中の「B」・「A」の両形は共に「見」字とすべきである、とする。そこでこの問題を「司法簡」と楚王故事三篇の間の史料的性質の対比から検討することにした。

包山楚簡の「司法簡」の中には個人の訴状が含まれ、それは官府に呈上され保存された官文書である。この一定の書式を要する文書の「B日」は、一定の書式の中に登場する。それらの書式において、告訴する者は「僕」と自称し、自らの身分を示し、その上で「敢えてB日に告す」と述べ、その後に具体的な訴訟内容を述べ、最後に「敢えてB日に告せずんばあらず」で結んでいる。戦国楚国の宮廷でこのような訴状を取り次いでいた者は、「司法簡」においてみな「B日」つまり「視日」に作る。

これに対して、上博楚簡の「昭王毀室」篇、同「君人者」篇、同「命」篇は、みな二次史料の「作品」である。たしかに「君人者」篇には「司法簡」と同じ「敢告於A日」の定型句がみられる。しかしその「A日」は単なる王への面会の取り次ぎ役にすぎない。それは「視日」が元々楚の宮廷で王へ訴状を取り次

ぐ者だった歴史を反映する二次的な表現に過ぎないのである。

では、「命」篇の「B日」はどうであろうか。「命」篇には「B日」が四箇所みえ、それらはみな令尹子春に対する尊称である。なぜ「命」篇では令尹の尊称になっているのであろうか。そこで想起されるのが、包山楚簡における陰人の舒慶の告訴とそれに対する判決である。この一群の文書を陳偉氏はA・A・B・B・C・C・Cの順に改編している。今、それに従って行論に必要な箇所のみを要約すると、次のようになる。

A . 舒慶は二人の人物に兄を殺されたことを宛公に訴えた。そのため一人は捕まり、一人は自殺した。しかし判決は下らず、そのうち父親や兄が逮捕され、舒慶はその不当を「視日」に訴えた。

A . 左尹は案件の判決を下すように命じた王命を湯公に伝達し、それを郢まで報告に来るように執事人に命じた。

B . 「視日」は舒慶の訴訟を湯公に委嘱し、迅速な判決を命じた。「視日」は執事人に報告するように命じ、某々を派遣した。

以上のやりとりで注目されるのは、「視日」と左尹の関係である。発掘報告書はこの「視日」を左尹とする。すなわち、A で舒慶の訴状を受け取った「視日」は、A の「左尹」と同一人物であり、B の「視日」もこれと同一の左尹であろう。したがって、「視日」は舒慶の訴状を受け取るだけでなく、訴状を楚王に上げた後、その王命を下達し、事後の報告を命じる権限があった。これより、「命」篇で葉公子高の子が令尹子春に対して「視日」と尊称しているのは、「司法簡」において左尹がその職務上「視日」と呼ばれていることを反映するものであろう。では、「視日」イコール左尹か。そこで「昭王毀室」篇に登場する「見日」について再検討した。

この故事は楚昭王の善政を伝えようとす

るものだが、そこにみえる令尹について、原文は「令尹陳眚爲見日」とする。その表現から、「令尹」は陳眚（人名）の官名であり、その日彼はたまたま「見日」だったという状況が読み取れる。つまり見日は官名でなく、そのとき彼が携わった職務を指す。また見日は左尹以外に、令尹のような高官もその職務に当たっていた。つまり、陳偉氏が想定するように、視日が「当日」・「直日」に当たるとすれば、左尹や令尹以外にもさまざまな官がこれに当たっていた可能性がある。そして当直者が上書を取り次ぐ場合、漢代の公車のように「日を視」る慣習があったのであろう。すなわち、「視日」とは、戦国楚の宮廷で当直者が「日の吉凶を視て」上書の取り次ぎを行ったことに由来するのである。

（２）「コウ之役」以後の楚秦関係

次に検討したのは、春秋史の転換期となる「コウ之役」前後の楚・晉・秦の関係史である。清華簡「繫年」第八章にこの戦役をテーマとする文がみえる。その内容は晉・楚争覇のことが全体の基調をなし、第八章は秦穆公の晩年に秦が「コウ之役」で晉に大敗した後、晉と袂を分かち、楚と友好関係を取り結んだ経緯が述べられている。「コウ之役」は晉文公没後、秦穆公と晉襄公の間で戦われた春秋時代の有名な戦役の一つである。そこで第八章の記事をとくに関連の深い『左伝』及び『史記』秦本紀・晉世家・鄭世家を中心にその内容を比較し、その史料系統の初歩的な整理を行った。

まず、第八章の全文に釈文・書き下し・通釈を施し、次に『左伝』にみえる「コウ之役」の記事を、1「コウの役の背景」、2「秦穆公の断行」、3「秦軍の無礼と王孫満の予言」、4「弦高故事と滑の征服」、5「晉襄公の親征と墨衰経」、「コウの役の敗北と秦穆公の悔恨」、7「楚との関係模索」に区分し、この戦役の背景と経緯、及び結末を整理した。

次にこの区分に従って、鄭世家・晉世家・秦本紀などの『史記』の関連記事を中心に重ねて、第八章・『左伝』・『史記』等の相互の異同を検証した。その結果、第八章の内容は『左伝』・『史記』等の伝世文献の範囲で理解できるものと判明した。ただし、7「楚との関係模索」が問題となる。それは、秦の捕虜となっていた楚の子儀が、「コウ之役」敗北による秦の対外路線の変更によって、楚との関係模索のための使者として楚に帰国したという内容である。それは、子儀の釈放がその後の楚秦関係に具体的にどのような影響を与えたのか、きわめて興味深いものであるが、これについては『左伝』に一定の記事がみえるのみである。

ところが、2016年に刊行された『清華大学蔵戦国竹簡（陸）下冊』の中に、「子儀」篇が収められている。この「子儀」篇は子儀の壮行における秦穆公と子儀の対話文で、「コウ之役」前後における秦・晉・楚の三国関係に関する重要な補完史料と考えられる。ただ、その対話文はきわめて難解で、具体的な背景に関する記述もみえず、まだほとんど研究論文も無く、理解が困難となっており、今後とも継続してさらなる検討が必要となっている。今回、その解読を試みたが、間に合わず、今後二期したい。

<引用文献>

裘錫圭「甲骨文中の見与視」（台湾師範大学国文学系・中央研究院歴史語言研究所編『甲骨文發現一百周年學術研討會論文集 1999』所収、文史哲出版社、1999年）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

工藤元男「清華簡「繫年」第八章覚書（『史滴』第38号、2016年）査読無

〔学会発表〕（計1件）

工藤元男「郡県少吏と術数 「日書」からみえてきたもの」（第60回国際東方学会会議、シンポジウム「中国古代における術数と思想」、2015年5月15日、於日本教育会館）

〔図書〕(計1件)

新川登亀男編『仏教文明と世俗秩序 - 国家・社会・聖地の形成 - 』所収、工藤元男「『視日』再考」(勉誠出版、2015年) 査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤元男 (KUDO Motoo)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号 : 60225167